PARIS，1987－1990

（原研）　高野　誠

パリへ来てからもうすぐ3年，そろそろ帰国準備を考えなければならない時期となりオミヤゲのことを考えると日本に帰るのが憂鬱になってきた。そんな所へ，原研の核データセンターから中川氏が出張でデータバンクへやって来て，こう言って帰って行った，「核データニュースに何でもいいから書いてくれ，今年オレ編集委員なんだよネー」。この3年間，英語のレポートはたくさん書いたが日本語のレポートは皆無，日本語も多少怪しく成ってきた時にこの話，さらに頭痛のタネが増え，そのうちタネから芽が出て頭痛の花が咲きパニックになりそう。それでも，年末に書き上げようかと思っていたが，こちらは日本のような正月休みが無い，元日のみ祭日で年末年始に休みがない，2日から出勤で〆切は1月10日だと言うし，どうしよう。初めは，皆さんの役に立つLUXEMBOURG公国にある銀行がやっている無制限マル優などの金儲けの話でも書こうかと思って，編集委員の中川氏に話したらボツにされそうなケハイ，どうも格調高い本紙には不向きのようなので残念ながらこの話はまたの機会にしておこう。でもそうなると，何を書こうか考えてもなかなか良いアイデアが浮かばない。週末の土日で一気に書こうと思うのだが，家族が「土日なんだから，どっか行こうヨー」と言うのが常でなかなか時間が取れず，とうとう今日（1月6日）土曜日にパリの図書館に脱出して「何でも良い」というから一気に何かデッチ上げる事とした。今いる図書館は，パリの市庁舎の近くのフォルネ図書館（Bibliothèque Forney，1, rue du Figuier）15世紀の建築でロワールの古城の様な所だ。それよりも私が此処に来た訳は，この図書館には1880年から1945年にかけて約5000枚のポスターが残っており，その中に私の好きなMUCHAのポスターが多数含まれているからだ。アール・ヌーヴォーの代表的作品である彼の官能的女性達に再会するのは後回しにして，まずは図書館の閲覧室で原稿をでっち上げてしまおう。

MUCHAの時代のパリ，つまり前世紀末の1900年前後，アール・ヌーヴォーが到る所で流行していた時代，その名残を今でもパリの所々に見ることができる。MUCHAの残したポスターは残念ながらパリでは，この図書館に来なければ見られないが，GUIMARDが設計したアパート等の建築物は今でも現役で残っており，普通のアパートとして使われている。パリの地下鉄入口は彼の代表的作品としてアール・ヌーヴォーに関する本を見ると必ず載っている。彼が師の一人として仰いだHORTAは，パリがアール・ヌーヴォーで踊り出す以前にベルギーで活躍しており，ブリュッセルに彼の手掛けた建築物がやはり現役で残っている。天気の良い日には，GUIMARD等の作品を鑑賞しながらパリを散策するのも楽しいものだ。こ

れらの建築物は普通に歩いていたのではあまり目立たない事が多く，少し建物の上の方を見ないとその凄さに気が付かない，でも注意，パリの歩道には危険がいっぱい，犬の糞。

さて，美人画のＭＵＣＨＡも少しは建築にも手を出したようだが，あまり多くはない。パリの有名レストラン，マキシムの向かいに建てられたフーケ宝飾店は店の内装，外装，共に彼が設計したものである。先日，オルセー美術館の本屋で学研の「アール・ヌーヴォーの世界VOL.1」を見つけ円定価の倍近いフランを払って買ったが，その中にこの宝飾店は現存せず，内装等はバラバラにコレクターの手に渡ってしまった，と言うような記述があったが，そんな事はない。学研にこれは誤りだという手紙を出さねばと思っているが，このフーケ宝飾店は，カーナバレ美術館（Musée Carnavalet，23, rue de Sévigné）内にほぼ完全な形で存在する。この美術館の展示室の一室がそっくりこの宝飾店となっている。動植物的な曲線のＧＡＵＤＩと異なり，ＭＵＣＨＡはあくまでも女性的曲線でこの宝飾店を埋めつくした様に思われる。その宝飾店の中に入るだけで一種異様な陶酔につつまれる。そこにいるだけで前世紀末の世界へタイムスリップし，まさに映画のワンカットの様に自分自身がワープし，突如として1900年頃の貴婦人たちが店内に現れる，と言うような異次元空間的メマイさえ覚える。ちょっとおおげさかも知れないが，機会があればまた行って見たい所ではある。この宝飾店は当時でもあまりに凄すぎて，商売の方はうまく行かず，長く続かなかったと聞く。

建築物に再び目を向ければ，現存しているアール・ヌーヴォー様式のアパートは外装だけでなく内装も大変凝った物が多いが，何せ個人のアパートとなっているのでそう易々とは入れない。しかし，パリ市内でも食事代と言う入場料を払えばアール・ヌーヴォー様式の内装をじっくり見学出来る所がある。有名なレストラン，マキシムやルカ・カルトン，手頃な入場料で入れる所としてはジュリアンやヴァーゴナンドなどがある。もちろん本当の入場料を払いオルセー美術館や装飾美術館等に行っても或る程度は見られるが，これらの美術館では何かホルマリン漬けの標本を見ているようで生気がない。アール・ヌーヴォーの作品は生活に密着していないと色あせて見えてしまう物が多いように思う。レストラン等として更に現役で生き延びてくれればと願っている。

さて，フランス人はアンケートの好きな国民だそうで，そのためかテレビのニュースなどで議論があるとニュースキャスターが，「あなたはこの点に関し賛成か反対か？電話番号ＮＮＮへ連絡してください。」と言うことがしばしばある。さらに，ミニテルと言う電話端末機を使って視聴者の回答を直接コンピューターに入力し，テレビに即刻，賛成・反対の割合が映し出される。このミニテルを使えば国民投票も容易に出来るのはないかと思うが，時速約300 Kmで疾走するＴＧＶを初めとして，ロケット，航空機，原子力と並んでこのミニテルも日本より進んでいる物の一つであろう。先日のアンケートは一般的なフランスのサラリーマンが仕事を終えてからなにするか，と言うもので，これに対しトップはテレビを見る事，それとレストランで食事をする事という結果であった。テレビはケーブルとなり，英・米・独・伊のテレビ局

もそのまま（原語のまま）見られ，パリの日本人がもっと増えればＮＨＫも入るように成ると思うが，現在のところ約20チャンネル程ある。家へ帰ってテレビを見ると言うのは日本と同じ，恐らく世界共通かも知れぬが，レストランへ行くと言うのはかなりフランス的ではないだろうか，勿論，夫婦一緒に出掛ける訳である。

つまり，レストランで食事をするのはフランス人の人生の楽しみの一つである。と言うことになる訳だが，そのためか彼らはこの楽しみに必ず２～３時間はかける。パリに着任した当初は，

レストラン　＝　時間を食う所　……ＥＱ　(1)

正にＥＱ(1)が成立した。日本と異なり料理が一度に出て来ない，したがって食べられる料理の皿は常にテーブル上に一つしかない。さらに一皿食べ終わると再びナイフ・フォークを新たにテーブルへ置き直す所からはじまり，またフリダシニモドルである。つまり，ＥＱ(1)のようにボーイがテーブル上の後かたずけやセットしている時間の方が食べている時間より長く，まーったくレストランとは時間ばかし食うもんだと思っていたが，この頃は１時間の食事では何か食べた気がしなくなってきた。少しずつ時間をかけてうまい物を胃袋にこれでもかと投下してやる，これが本当の食事のように思えて来た。しかし，レストランへ行った翌朝は胃袋が昨夜の爆撃で完全に伸びている。こんな事を繰り返している内に胃袋の方もフランス化して，日本食のような淡白な物を食べると胃酸がわき胃袋が不平を言うようになってしまった。

食事その物だけでなく，レストランではその内装を見るのも楽しみの一つである。フランス語学校の仲間にコルドンブルーと言う料理学校に通っているコック志願のアメリカ人がいたが，彼に言わせれば「内装など女性の化粧と同じで，コックの腕が良いところは内装などでごまかさず，むしろシンプルな内装の所が多い」との事であった。だが，残念ながら私にはボルドーの高級ワインの飲み比べと同じで，値段の差は判るが味の差は良くわからぬ。やはり，内装や他の客をみてレストランの品定めをしてしまう。内装がベルサイユ宮殿のように，金ピカ，あちこちに壁画や天井画，さらに，所狭しと置かれた各種置物や飾り花，そしてめかし込んで来た女性客などに目を奪われている内に食事の方は終了し，後で考えても何を食べたか良く思い出せないような所もあった。確かに，レストランとは日本の結婚披露宴のような少し気取った光景が毎晩繰り広げられている所といえよう。パリでも最上級の部類に入るレストラン・マキシム，ここに来る客の多くは結婚式でもないのにダークスーツでやって来る。女性客も黒のカクテルドレスでしゃれこみ，我々の横のテーブルで食事をしていたイタリアの４人連れも皆，黒一色で決めていたが，何かマフィアの会合をふと連想してしまい吹き出しそうになったことがある。まあ，時々着かざって自分の存在をハイレベルの世界で確認するのも悪くはない。

しかし，レストランよりも何よりもフランス人にとってバカンスはなくてはならないもの。フランス人が毎年待ちこがれるバカンス，フランス最大の年中行事と言えよう。ここで単純に休暇日数を原研の場合と比べると，ＯＥＣＤの場合，有給休暇年間30日，ＯＥＣＤが定めた祭

日が年間12日で合計42日ある事になる。一方，原研では有給20日，夏休み７日，正月休み６日，創立記念日，祭日14日（元日を除く）で合計48日ある。ここで，週休２日制との相違は，年間12日であるから（半日×２回×12月）差し引くと36日間となりＯＥＣＤよりまだ６日間少なめである。完全週休２日制を早く実現して欲しい所だ。それでも36日の休暇があれば，１ケ月間の夏休みは十分可能でありフランスのように初めから１年を11ケ月として仕事の計画を立てると言うような配慮が必要だろう。もともと年休分休んでも，休まなくても給与は同じ，休まないと損。日本は，もはや食うに困った国ではなく、金持ち国なのだから皆どんどん遊んだらいいではないか。休みも取らずにせっせと働いて得た儲けは，まわりまわって海外に出て行きあちこちの不動産を買いあさり，対日感情を更に悪化させるだけである。また，人生，仕事だけと言うのはあまりにもミジメと思うが。

先に，フランスの方が日本より進んでいるものについて少し書いたが，もう一つここで加えておこう，それは国民の生活だ。なるほど，物質的には日本人の方がフランス人より恵まれていると思うが，フランス人のほうが日本人より人生をずっと楽しんでいる。最近，地下鉄などで面白いポスター広告を目にした。そのポスターにはビキニ姿の若い女性が夏の浜べで日光浴がてら読書をしているという，ごく一般的なバカンスの光景があった。ところが，そのポスターの上半分に「この間にも，日本人たちはせっせと働いている。」と言う意味のフランス語が書かれており，オヤと思ったが，日本人の私が見れば日本人は働き過ぎ，フランス人が見ればフランス人は働かなさすぎ，と言う広告のようだ。フランス人にとって日本人は，彼らの人生最大の楽しみを脅かす嫌なやつらと写っているのであろうか，真の趣旨は，フランス人よもっと働けと言う政府広報のようだ。このポスターをそのまま日本へ持って行って，「日本人よもっと休め。」という広告にもつかえそうだが，いずれにしろ両者のギャップは私が会社を定年になるまでには埋まりそうもなく，絶望的である。ここで，同僚のフランス人女性がいつか私に言っていた言葉を思い出した。「私は何処かの国の人（当然，日本人のこと）と違って，働くようにはできないもの」，彼女は女王バチ，日本人は働きバチ，これが日本だったら反発を食らう所だが，フランス並のバカンスを経験した身には全くそのとうり，異議なしである。実際仕事が細分化されている事もあるが，必要最低限しか働かない人が多いのも確かだ。でも，これで社会もそれなりに動いている。彼らが目指すのは働かずとも楽に暮らせる状態であろう。労働は彼らにとって必要悪，財テクに精を出し適当な貯えが出来たら定年以前に退職して年金生活に入ることを夢見る人，人生にもいろんなスペクトルがあって面白い。原研に戻ったら「「バカンスクラブ」でも作って，「みんなで取れば怖くない，１ケ月の夏休み」運動でもしようかとマジメに考えているこの頃である。

1990年１月

（在パリ，ＯＥＣＤ／ＮＥＡデータバンク勤務）

フォルネ図書館のあるHotel de Sens の外観